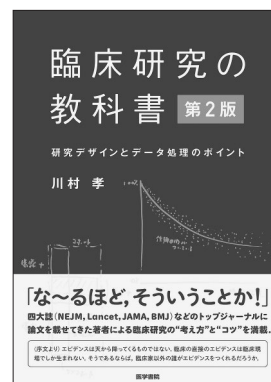


BOOK Review

臨床研究の教科書 研究デザインとデータ処理のポイント 第2版

評者 曾根 博仁 新潟大大学院教授・血液・内分泌・代謝内科



そのものずばりの書名どおりの本である。多くの類書に目を通すが、その中でも本書は、臨床研究をやりたいと教室の門戸を叩いてくれた若い皆さん（臨床医、メディカルスタッフ、非医療系大学新卒生などさまざま）に薦める最初の数冊のうちの一冊となっている。

当教室にはすでに、多くのタイプやサイズの大規模臨床データベースが存在し、著者の川村孝先生も本書内で同様のことを述べられているように、「世界の臨床現場に役立つエビデンスを自ら創る」という方針の下に、院生は修士・博士にかかわらず、すぐに研究最前線に投入され、先輩院生やスタッフと同じように独立したテーマで、先行研究調査→解析計画立案→データ解析→学会発表→論文作成に取り組むことが求められる。しかし、多くの臨床教室と同様、指導に当たる先輩院生やスタッフも、基礎から手取り足取り教えている時間的余裕は少ない。そのような状況で、初心者でも即戦力にする（少なくともわれわれとある程度ディスカッションできるようにする）のに必要な、（川村先生も本書内でおっしゃる）「疫学・統計学的センス」を短期間に身に付けてもらうのに最適の書である。

改版を機に、愛読していた旧版と並べて再読してみた

が、初学者のみならず、長年臨床研究に携わっている者にとっても、知識のブラッシュアップとアップデートに極めて有用とあらためて感じた。新版では、臨床研究現場ではすっかりお馴染みになった「傾向 (propensity) スコア」や、「メンデルのランダム化 (Mendelian randomization) を含む手段変数法」「ネットワークメタアナリシス」などの記載が強化され、直観的にわかるように要領よく解説されている。全体的に、説明が簡略過ぎず詳し過ぎず、適度な心地よい。若い人たちに毎年繰り返し言っているポイントが、私などが言うよりはるかにうまい、絶妙な言い回しで解説されている。したがって、「まずこれを読んで」と安心して言えるという点で、大変助かっている本でもある。

臨床研究、特に臨床疫学、臨床データ解析をやろうとする研究者が必要とする重要概念がカバーされており、さらに、研究を計画すると頻繁に遭遇するさまざまな事象に対して、妥当かつ適切な対処法が簡略に示してある点は、著者の長年の臨床研究教育研究者、コンサルタントとしての学識と経験の深さを伝えて余りある。そういうわけで、本書は、今後ともお薦めの書であり続けるだろう。

川村 孝 著

B5判/286頁/2020年/定価4,620円(本体4,200円+税10%) / ISBN978-4-260-04237-6 / 医学書院刊